我はいかにして途上国学徒となりしか

塩田 光喜

◉第一六話　大往生 ―曽祖父慶吾の死―

笑いながらの死！
リヒャルト・ワーグナー『ジークフリート』

昭和の出だしは低調だった。初っ端からデフレ。一九二七（昭和二）年には金融恐慌。銀行は相次いで倒産し、取り付け騒ぎが起こる。一九二九（昭和四）年七月、民政党の浜口雄幸が首相、井上準之助が蔵相に就任し、金解禁を行う。その年、一〇月二六日、ニューヨーク株式市場は「暗黒の木曜日」を迎えて、株価は大暴落、世界大恐慌が始まる。金解禁を行った日本経済は世界大恐慌の直撃を受け、名目GDPは一九三〇（昭和五）年、一九三一（昭和六）年と連続して一〇％近く下落する。一九三一年九月一八日には、満州事変勃発。動乱の昭和が開始する。

だが、曽祖父慶吾のイリコ商売は順調に推移を続け、祖父定助の国際スパイス・トレードは上昇気流に乗っていった。ここにも「近代日本鳥瞰」史と「近世民衆虫瞰」史の間には、懸隔がある。

一九三一（昭和六）年一二月一三日犬飼毅を首班とする政友会政権が成立。蔵相には高橋是清が就任。金本位制から再び離脱し、管理通貨制度に変更。積極財政に転じた。これにより、長年にわたるデフレは解消し、名目GDPは一九三二（昭和七）年には八・四％の上昇をみせる。その年、五月一五日に、犬飼毅が軍人に暗殺されるが、名目GDPは増加を続ける。

曽祖父慶吾は相変わらず、燧灘のイリコを大阪に卸している。

一九三四（昭和九）年の九月にも大阪へイリコを運ぶと、商売相手の乾物問屋に泊まり、商売相手と将棋を指していたが、突然、「ウーン」と唸ると、ドウと横転した。脳出血。即死だった。九月二九日。慶吾らしい豪快な死であった。

遺骸はすぐさま仁尾に運ばれ、一族あげて葬儀を執り行った。行年五九歳。浮沈の激しい人生だったが、晩年は荒波を乗り切り成功を収め、大きな遺産を家族に残した。明治の男の生涯であった。

だが、ここに思いがけない事が起こった。

長女のよし江、大阪屋に嫁ぎ、商売を切り盛りしていたヨッセさんが寝込んだのである。今日でいう鬱病である。

仁尾の町の人達は、「幼い娘が死んだ時も寝込まなかった人が、親父さんが死んだら寝込んだ」と言って、嗤った。

曽祖父慶吾が、男としてどれほど魅力的だったか、この一事を以っても知れる。

やがて、ヨッセさんは、ショックから立ち直り、再び、大阪屋の切り盛りを始めた。

（しおた　みつき／アジア経済研究所　貧困削減・社会開発研究グループ）